桂菴和尚家法倭點

全

811.6
G29k

916Ke115k

国立国会図書館
25.8.10

210557

家法和點解題

家法和點は桂菴禪師の著なり、禪師は周防の人、稱光天皇の應永三十四年なる足利義持將軍の時に生れ、年甫めて九歲京に遊びて南禪の惟肖得巖に師事し、十六出家、後に馬關の永福寺に居り、遣明使僧の才を試みし時、大梅々子の偈に一頭地を拔きて年四十一の應仁元年、天與清啓と共に入明し、明の憲宗に燕京に見えて、更に蘇杭の間に游び、年四十七の文明五年歸朝せしが、應仁以來兵亂未だ罷まざりければ、亂を石州に避け、尋ぎて九州に游歷し、肥後の隈府に菊池重朝の建てし聖廟の釋奠に列し、遂に島津氏の禮聘を受けて薩州鹿兒島に入りしは、文明十年二月廿一日にして師年五十二なり。

是より先き我邦の儒家は、漢唐の古註を奉じたりしが、王朝の衰微と共に學術地に墜ちて口傳祕傳の陋に陷り鎌倉の末に至りては、當時の儒宗菅原爲時の如き、禪僧辨圓に翻弄せられて道統の間に窮せしあり、而して一方には宋元交通の盛なると共に、禪徒に學僧輩出し、皇家武門の崇仰を博したりしが、時に支那に在りては、宋代の學者、漢唐の訓詁に甘んせず、窮理の學勃興して、學風一變せり、之を新註と云ひ、性理學と稱し、濂(周茂叔)洛(二程)關(張橫渠)閩(朱子)の五子、聖廟に從祀せらるるに及びて、其の學大に行はれつ、宋僧道隆、普寧、元僧子曇、祖元、一山の徒相踵ぎて我邦に歸化せしは、實に宋學即ち程朱學の大に支那に行はるゝ時代なり、我邦に於ける宋學の起源は、明確なる

史徵を缺くといへども、蓋鎌倉中葉の末期、末造の初期に在るを疑はず、而して宋學傳來の使命を果しゝ者は、禪僧たるや亦明なり、台僧玄惠尤も程朱を遵奉して、後醍醐の經筵に侍してより、延臣從學する者多く、中にも北畠親房其の蘊奥を得て一泓を開きしが、禪家には同時に虎關師錬あり、尤も濂溪に心服し、中岩圓月あり、程朱を崇奉せり、虎關の同學夢窓、夢窓の徒弟義堂、相繼ぎて武家の師と爲り、義堂尤宋學を崇んで、慫慂甚だ力めしより、禪子皆程朱の理學を以て參禪學道の一助と爲し、岐陽方秀に至ては始て四書には、訓點を施せり、岐陽の門に惟肖得巖、雲章一慶あり、桂菴は實に惟肖の門に出でゝ、岐陽の遺書を讀み、尤も宋學の尊ぶ可きを知りし人なり。

然れば桂菴の明に入るや、蘇杭の諸儒に就きて宋學を研究し、歸朝の後も、專ら鼓吹する所あり、薩に入るに及びては、太守島津忠昌の爲に書經蔡傳を講じ、國老伊地知重貞と謀りて大學章句を刻したりき、此を日本に於ける章句出板の先鞭と爲す、誠に儒學史上の一大偉勳にあらずや。

桂師は年八十二の永正五年六月十五日を以て鹿兒島に歿したりしが、此の家法和點は蓋晩年の作なり漢學約源桂菴傳の註に據れば、慶長十六年俊正といふものゝ薩州山川に於て寫しゝ寫本ありて、其表題には『四書五經古註與二新註之作者一幷句讀之事』とあり、本文も板本に比すればいと多しと見ゆ、桂菴の門に月渚英乘あり、月渚の門に一翁二州あり、一翁の門に文之玄昌あり、文之の門に如竹散人あり、如竹は薩州屋久島の人にして、初め日蓮僧徒なりしも、宋學を文之に受けて後ち還俗し、江戸に出でゝ藤堂高虎の侍讀たりしが、此の書は如竹の手に依て寛永元年（元和十年改元）江戸に刻せしものなり、然れば如竹刊行の時に、表題をも改め、又本文をも删改せしにや、末文の年代を引合はしゝ處の元和十年は、明應十年の誤なるよし漢學紀源にも記したれば、桂菴の此の著作は、年七十五の明應十年（文龜と改元）頃にもやありけん、本文の普廣院殿御時云々も時代合ず、刊行の時の誤なるべし、其は兎も角も、如竹なくんば、此の書或は湮滅して人間に傳はらざりけん、刊行の功も亦大なり今や刊本すらいと少し、上村觀光君が今之を活版に付して『禪宗』の附錄と爲すは、學界に貢獻する所以の者淺からず、豈啻に桂菴四百年忌に於ける供養とのみ云んや。

抑訓點は古來容易ならぬ事と見ゐ、游仙窟の渡りし頃、文章生英房は神詫を受けて點するを得たりとすら傳へらる、古來點圖といふもの多く、諸家の苦心も推測られたるが、如竹の話を其門人の愛甲喜春が聞書せし者に四書の倭訓は岐陽之を創め、桂菴修正し、文之も亦稍改正して、之を如竹に授けしを、如竹江戸にて梓行せり、世に文之點といふも、實は文之の創むる所に非ずとあり、文之點四書の梓行は寛永二年にして、道春點四書の出でしは頗る後れたりと聞く、坊間得る所の四書古本を檢するに、往々文之點を改刻せし痕迹を見る、文之點には一種の特色あり、其の特色は此の家法和點の定めし讀法に據りしものなり、以て此の家法和點の學者を益せしこと多大なるを知るべし、道春點は惺窩點を潤色せしものなり、惺窩は自ら四書倭訓の原本なりと誇れり、然れども漢學紀源は愛甲喜春の聞

書に據りて、惺窩明に入らんとしゝ時、鬼界ヶ島に漂着し、歸路薩州山川に於て、桂菴點の四書を獲て東に歸り、窮んで以て己の功と爲しゝものなりとの說を爲せり、是れ儒林の一大疑獄なり、予は未だ此の疑獄を斷ずべき史證を有せず、亦必しも此の疑獄を判斷せざる可らざる必要を認めず、但讀者が此の家法倭點を讀みて、桂菴讀法の特色を知り、之を文之點と古點論語とに比較して、其の苦心を知ると共に、桂菴文之如竹の學界に於ける偉功を記念せんことを望むのみ。

明治四十一年十月七日

後學　西村時彥識

桂菴和尚家法倭點

四書六經、朱晦菴悉雖有欲斥其謬正其失之志、於四書既經年月、老年不幾、故先五經內、謬失最甚者、周易詩、先生自作傳與本義、宋朝以來、儒學不原于晦菴不以爲學焉、故兒童走卒、皆誦不宗朱子元非學看到匡廬始是山兩句、唐音不宗朱子元非學看到匡廬始是山、此意、漢儒以來儒者雖多以晦菴爲宗之義也、宗領也、匡廬山、於山衆美相備、譬朱子之學也、

新註諸家之說、違背晦菴之義者、皆不敢取也、

四書者、大學、舊禮記第四十二篇也、二十九卷載之、今晦菴章句、中庸、舊禮記第三十一篇也、二十五卷載之、今晦菴章句、論語、古註何晏集解、今晦菴集註、孟子古註超岐、今晦菴集註、

五經者、周易、古註王弼、新註程子作傳、朱子作本義、二十四卷六十四卦、

尚書。古註、孔子十一世孫孔安國作傳、新註、晦菴門人蔡沈號九峯先生、作集傳、今題書經、十卷五十八篇。周詩、古註、毛亨作訓傳、授毛萇、故號毛詩、新註、朱子作傳、今題詩經、二十卷、三百十一篇。左傳、古註左丘明作傳、故名左傳、杜預作註、新註、南宋高宗時、胡文定公作傳、今題春秋、胡傳三十卷、魯國史記也、隱桓莊閔僖文宣成襄昭定哀、此十二代、二百四十二年之間記之、此時號春秋之世、上雖有周王、號令不行、號大國十二諸侯、此書非魯國事而已、各國戰伐、是非得失皆載之、以爲後世之戒、治國家者、不可不讀此書也、禮記、古註、鄭玄字康成作註、新註、宋元之間、陳澔作集說、古今名禮記、三十卷、四十九篇、

若人問五經、新註、如何答、易朱子本義、書蔡氏傳、詩朱氏集傳、春秋胡氏傳、禮記陳澔集說、蔡氏傳、朱子傳之傳、濁可讀也、胡氏傳之傳、清可讀也、集傳集ハ、シュウト、ウヲ可添也、集說之集ハ、シュウト、ウヲ畧也、說ハ、ゼット濁可讀也、

六經者五經加孝經也、

南宋淳熙十六年己酉晦菴撰大學中庸序、此時新註行于天下、

大明永樂十三年乙未、撰四書五經大全二百二十九卷、此時天下破棄古註、無家藏古書一本者也、

普光院殿御代、渡唐船雖載新註來、叢林不事本書之學、故不辨新古之好惡、

東福不二岐陽和尚、初講此書、凡正本國傳習之謬、以便於叢林說禪、宜於土俗世話、爲要而已、

建仁龍雲有論語集註。其卷末有書岐陽和尚講筵之說之本、云、大唐一府、一州、其外及郡、縣、皆有學校、日本纔足利一處學校、學徒負笈之地也、然在彼而稱儒學教授之師者、至今不知有好書、徒就大唐所破棄之註釋、教誨諸人、惜哉、後來若有志本書之學者、速求新註書而可讀之、云々、

句讀之事、字訓曰、句切也、絕也、一句フット、キル、處也、一句トハ一

字モ一句也、曰ノ字ハ、一字ノ一句ナリ、或ハ二字三字、或ハ十字二十字、雖多爲一句之處有之、其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣、此十三字、一句也、讀音豆、韻會宥韻曰、凡經書語絶處、謂之句、語未絶而點分、謂之讀句、點於字之旁、讀點字之中間、云々、私云、旁トハ、字ノ下、右ノ旁也、中間トハ、字ノ下、眞中也、イカニモ朱點、ナカト、ソバト、マギレヌ樣ニ點之也、人ノ初心ナヲ云ニハ、句讀サヘ、ワキマヘヌト申也、法華經ノ、句切ル樣ニ、字ノ下、マンナカバカリ、朱ツケオイテハ、句讀ノ差別、如何可知哉、

語、辭助、辭、事、註者、意、有差異耶、此皆オキ字ト申也、之乎者也爾、哉矜諸於歟耶矣焉已而耳如然、此外猶有之歟、

之字、ユク、オイテ、此時ハ當字可點也、子之武城、云々大學ニ、人之其所親愛而僻焉之類、コレ、コレカ、此ノ時ハ末假名バカリ可點也、ノト、讀時ハ上ノ字ノ下ニテ點シ添ルナリ、當之字點スルハ、鈍ナリ、其爲仁之木與之類又中カニ、オクコトアリ、謂之文、又如之トモヨム、此ノ字、句ニ切ル處アリ、學而時習之之類、

乎、耶、歟、此三字、大略、ヤト、カト、讀也、コレモ、上字ノ下ニテ、點シ添也、不亦說乎、其爲仁之本、歟之類、

者字、云ハト、德者、如此點、又上ニ也字アラバ、ナリト云ハト、可點也、

也字、江西云、讀文也字、而字、句讀能可辨、云々句ノ時ハ、ナリト讀テ、可切也、但ナリト、ヨマレヌ處アリ、然ドモ一句ノ、トマリナラバ、句ニ可切而好作亂者未之有也之類、讀ノ處ハ、大略、ヤト讀テ下ニカクルナリ、ヤノ點、上ノ字ニ、點添也、其爲人也之類、又ヤト、ヨメドモ、句ニキル處アリ、字訓誠、實也、是讀クセナリ、又人ノ名ノ下ハ不點、皆ヤト、可讀、古點回也バカリ、ヤト讀テ、商也、賜也之類、不讀、曲事也、又ナリノ點モ、上ノ字ニテ、點添也、ヤトモ、ナリトモ、不讀處アリ、

乎、諸、於、于、此、四字、返點中、アルトキハ、皆無讀也、諸字、ヤト、讀處多也、其

舍諸、其猶病諸之類、又不讀處アリ、於字、于字、上ニアルトキハ、オイテト讀也、二字多クハ、通シ用ル也、

而字、大畧讀ノカシラ字ナリ、但シカレドモト、讀ムトキハ、句ノカシラニモナル歟、又不涉句讀處アリ、人不知而不慍之類、新註、此而字、而毎字、如此點、其故、古點不讀オク故ナリ、學而時習之、此一句、論語首篇之篇首五字皆肝要字也、爭可不讀乎、古點ニ、マナンデ、トキニ、ナラフトバカリ讀テ、而之兩字不讀、曲事也、但下ニオイテ、ヨマレヌ處アリ、已而已而今之從政者殆而之類、又反而遠而、周詩辭、註曰、而語助、是ハンタリ、トヲケレバナリトモ、讀ムベケレドモ、ハンジ、エンジト、讀テ、令知有而字也、又ナンザトモヨム、中庸而強歟、註曰、而汝也、

矣字、大畧一句切處也、故ヌト點ス、又レリ、タリ、ケリ、ト讀テ是令有矣字也、又有其中矣之類、又ヌト、ヨマヲトモ、一句切、ル、意、必有之民德歸厚矣、可謂孝矣之類、此字モ、上ノ字ニテ、點添也、又ヤト、カト、讀處アリ、可已矣之類、又添乎字ヲ、カナトヨム、已矣乎、至矣乎之類、但ヨマレザル處多也、清矣、鮮矣之類、又句カ、讀カ、中ニオクモアリ、鮮矣仁、甚矣吾衰也、久矣、吾不復夢見周公之類、

焉字、イヅクンゾト、讀ム時ハ、皆於虔切、人焉廋哉之類、又コレト、讀處アリ、下必有甚焉者矣、大學、心不在焉、中庸、上焉下焉、論語、焉往而不三黜之類、大畧不讀處多、如丘者焉、女得人焉、爾乎、井有仁焉、又聲ヨミツヅクル處アリ、大學序、各俛焉、云々

耳、爾、而已、也已、可謂好學也已、不足觀也已、斯害也已、也字アル時ハナラクノミトヨンデ、令知有也字也、

也已矣　亦各言其志也已矣、

已矣　可言詩已矣、

而已矣　無所苟而已矣、忠恕而已矣、

焉耳矣　盡心焉耳矣、

已乎　此二字、ノミト難讀歟、斯謂之君子已乎、

已字、韻會紙韻上聲三處出之、初已、苟起切、月令、其日戊巳、又歲在巳日屠維、又身也、對物而言、曰彼己、論語、克己復禮爲仁、次字母以字、羊里切、止也、訖也、甚也、又語終辭、孟子、仲尼不爲已甚、註、已猶太、又次字母似字、象齒切、歲在巳日大荒落、辰巳、又上巳節名、又陽氣生於子、終於巳、故爲終、今俗以有鉤挑者爲辰巳字、無鉤挑者爲終巳、未識義也、云々以上見于韻會、又ヤムト、オハルト、ヨム時、音シ、孟子予不得已、待來年然後已之類、已、廣韻寘至志韻去聲載之、註曰、過事語辭、韻會韻府去聲不載之、孟子已字多、註曰、助辭、イヅレモ、ノミトハ、難讀也、可知已、註曰、語助辭、孟子皜々乎不可尙已、放辟邪侈無不爲已之類、私云、鉤挑トハ、字ノ、カギヲ云也、カギトハ已。」此カギナリ、辰巳ノ巳モ、オハリト讀ム、已同字ト云意也、

哉字、與乎字ト、小シ異ナリ、

兮字、鳳兮々々

思字、中庸神之格思、註曰、思、語辭、此思字不讀也、

則字、古點上ノ字ノ下ニテ、トキンハト、點スル時ハ、スナハチト、ヨム事マレナリ、故ニ新註朱ニテ、則毎字如此點スルナリ、ニ爲可正古點、讀落也、又墨點ナラバ、字ノ右ノ肩サシアゲテ、毎字、スノ假名可點也、點セバ、必上ノ字ノ下ニテ、トキハト、可點也、トキハノキニハ。＼如此可引、キノ假名ヲバ、不用也、但トキハト、ヨマレヌ處モ、アルベシ、古點トキンバト、點ズルハ、カタコトナリ、又ノリトモ、ヨムナリ、爲天下則ナゾラフトモヨム、堯則之又ノツトルトモヨム、

將宜當盍令教使俾遣須未此字皆二度讀也、點スルニハ、マサニ、ヨロシクマサニナンジテ、シテ、スベカラク、シム、ベシ、サル、シム、シム、シテ、スベカラク、イマ、シ、ベシ、ナンジ、スベカラクヲバ、末假名バカリモ好也、ノハ、皆下ノ字ニテ、點添ヘテ、シムヲバ、當其字、右シムト、點スルナリ、令人知之類、雖三字、用一二ノ點、古點ニ、令如此點スレバ、一二ノカヱリ、二ノ假名、シム

210557

ニ、サシアフナリ、未字ハ、タノ假名ヲハ、點スルモアリ、又不レ點アリ、ジト、トマラバ、ジノ假名ヲバ、左ノ肩ニ可レ點也、未不二字、ズト、トマラバ、不レ可レ點也、

與字、讀多、ト、トモニ、クミス、アヅカル、シメス、カ、アタフ、ユルス、ヨリ、與ニ二三子ニ、孟子ニ、與ニ人ニ、爲レ善、註ニ曰、與許也、又韻會、魚韻、歟字、註ニ曰、今經傳ニ、通作レ與字ニ、俗以テ爲ス語末之辭、增韻ニ、疑辭也、

大字、大學、註ニ曰、大舊音泰、今讀如レ字、是濁テ可レ讀之註也、又論語、註ニ曰、大音泰、是レスンデ可レ讀註也、然大ハ不レ音濁テ可レ讀也、

其諸字、註ニ曰、語辭、景召曰、如レ此字、音訓共ニ不レ讀也、既ニ有レ註上、如レ古點、ソレトモ、不レ可レ讀、セメテ、アヽト讀ムカ、又ヲンノト讀ムカ、令レ知レ有ニ其諸字、云々此外語辭、助辭ト、註スレドモ、不レ讀處アリ、涯分ソラニ讀ム時、某ノ字アリト、可レ記臆也、

嘻、噫、咨、吁、於戲、嗚呼、

誰字、誰カメニカヒン爲ニ誰與、

孰字、イヅレトモ讀也、

何字、イヅレ、イヅク、ナンヅ、ナニヲ、イツカ、何當ナンヅランナニヲカトラン、何孰、

奚字、大畧與何字讀同、奚自イヅレヨリソナニヲモツテカセン、奚以ナンヲソレヲ、ザン、奚其正イヅレニカセン、奚先此何ノ奚二字、末假名バカリモ、一字皆キコユル樣ニ、點スルナリ、

夫字、ソレ、カノ、若ニ夫成功ノ則天也之類、又大畧、カナト讀也、善夫カナ、有レ是レ夫、不仁者ノ有レ夫、不レ秀者ノ有レ夫、

曰字、ノタマハクヲ、ノタフバクトハ、鄉談也、平家ニモ、賴朝ノノタマハクト、コソアレ、子曰ハ、皆ノタマハクト、點スルナリ、ノ玉ハク、如レ此モ點スル也、又曰トモ點スル也、イハクハ、曰、如レ此モ點スル也、堯舜禹湯文武周公孔子ハ、皆ノ玉ハクト可レ點、但周孔モ、對レ君上ニ、イハクト可レ點也、見ニ于論語之註、

如字、ゴトクシ、ゴトクニス、祭如ゴトクスカルヲ在祭ルヲ神如シ神在スガニ上下有ニ二字、如レ此ノ讀也、

又モシトモ、アルヒハトモ、ヨム、

或字、アルイハ、アルハ、是ハ下ノ、イノ假名ヲ、不讀也、又モシクハトモヨム、

事字、君上ニハ、ツカフマツル、父長ニハ、ツカフト讀也、事父母能竭其力事君能致其身之類、其外依註釋、叶世話、抑揚之讀、可有之、

樂字、依韻音訓カハルナリ、タノシミノ時ハ、音ハ洛、藥鐸韻也、音樂ノ時ハ、覺韻也、不音如字、ヲガフノ時ハ、音効、去聲、効韻也、此外依韻依聲、又依體用字ノ音訓カハルナリ、體トハ、人也、人體是也、用トハ人ノ能知才藝、萬事所作是也、山體也、山ニ生長草木、山ノ用也、

治字、國治自然オサマルハ、體也、治國人所作、用也、體ノ時ハ治ノ字去聲、用ノ時ハ、平聲也、

食字、イヽト云時ハ、體也、音嗣、クラフト云時ハ、用也、音ショク、

好字、經傳去聲、聲有之、皆コノムト讀也、ヨシト讀時ハ、皆不聲、

惡字、虞韻音烏、註曰、安也、語惡乎成名、孟子、居惡乎在、云々又アヽトモヨム、孟子、惡是何言也、又アシヽト云時ハ、音アク、善惡是也、ニクムト云時ハ、音ヲ、好惡是也、此類甚多シ、

見字、去聲、霰線韻也、韻會一韻兩處出之、初曰、見、經電切、角清音、視也、未曰、見、形甸切、羽濁音、露也、顯也、俗通作現、聲與反有之、皆アラハル、マミユト、可讀、八侑章、義封人請見曰、君子之至於斯也、我未嘗不得見也、從者見之、註曰、請見、見之、見賢遍切、得見見無反也、マミユ、童子見、見其二子、アラハル、天下有道則見、皆賢遍反、中庸見蓍龜、見ハ音現、聲與反無之、皆ミルト可讀也、大學視不見之類、ルヽノ時モ同シ、見惡之類、

自字、ミズカラトヨム時ハ、自如此、点スルナリ、オノヅカラノ時ハ、自如此、点スルナリ、末假名ヲ、カラト、点スルハ、ミツカラトモ、ヲノヅカラトモ、不知也、

爲字、爲、爲、爲、如此、点ス、イカニモ、サシアゲテ、字ノ右ノ肩ニ可点サケテ点スレバ、爲ノ字、シノ点ハ、ナシニ、マギレ、スノ点ハ、ナス、タメニ

スニマギレ、シテノ点ハ、ナシテノ点ニ、マギルル也、爲政爲人、爲爲國之類、又爲是ハサゲテ点スルナリ、爲右肩去聲、聲有之、皆タメニト可讀也、タメニト讀ニハ、經傳皆去聲アリ、又爲氣稟所拘之類ハ、去聲ニアラズ、

川、此三、竪点。一字ノ時音右、訓左ナリ、二字ノ時音字ノ下タ中也、訓ハ字下左ノ旁也、三字マデハ、音訓トモニ引也、大學、苟日新日日新、論語吾日三、申々如也、天々如也、又三字ツヽケドモ、不引處アリ、一家仁之類、又湯桶文章トテ、一字ハ訓、一字ハ音ノ時、能考字輕重、其重字ニヨツテ、可引音訓、点大學其知知至之類、又及四字、二字ツヽ引クナリ、王宮國都之類、

カリカヲノ点ノ事、イカニモ、木字ノ点畫ニマギレヌ樣、左ニヨセテ点スル也、二字三字、乃至五六字マデモ、下ヨリ讀ノボセバ、可用鴈金也、不可用一二点、雖三字、中于於等置字アラハ、可用一二点、其一二上ニ、又讀ノホスル字アラハ、可用上下之点、人有貴於己者之類、上下ノ上、猶讀ノホスル字アラハ、可用甲乙点、一二上下、甲乙之点ハ、不点カナハサル處ニ用之也、古点ニ、任筆可点鴈金處ニ用一二、一二ノ處ニ上下甲乙ヲ用フ、甚惡也、

井、オ、ワ、此假名ハ、依辭用之也、居ノ字ナントヲ井テト讀時用之也、又オワノ假名ハ、オモフ、オシム、ワタル、ワカルト云ニ用之也、下ニハ大畧不用之也、是ハ假名ツカイナリ、

フ、丁、七、ア、メ、ヿ、此假名、新註用之、但フヲ、ウニ用ルハ、訓讀ノ時用之、音ニハ又不入聲字用之、不入聲トハ、兩音韻也、入法、合十之類、東平聲、鳳去聲、孔上聲、此平去上三聲、フヲ、ウニハ不用也。丁ヲ、マニ用ルハ、ニコノ假名マキル、故乎、七ヲ、サニ用ルハ、易点故乎、アノ假名ハ、アニマギレヌ樣、イカニモ、ナ、メニ引也、メノ假名ハ、メニマギレヌ樣、ナガク引也、此メノ假名ハ、只、テニハ、バカリニ、点スルナリ、賢其賢之類、又

其字ヲ、訓ニ讀辭、中ニハ、シテト點スル也、指東、指他、爲人君、爲人善之類、ヿ此假名、メト同意、辭中ニ如此點スルナリ、不得已、毋自欺也之類、其誠、其言之類ニハ、ヿヲ不用也、

ン、ヌ、ム、此三假名、依其辭可用之、ムト、ヌトノカハリ、有之歟、此ンノ假名ハ、未來ノ辭也、ヌノ假名ハ、トマリヌトテ、假名ノムスビぬナリ、云イハツル辭也、無ノ字不ノ字之意也、

ヲ、ネ、ニ、爾、トキ寸、古點ニ、如此カヘテ、點スル事アリ、甚惡也、本字ニマキレ、又ムツカシキ假名、畢竟無用也、

字ヲ音ニ讀時、末假名バカリハ不点、東如此、皆點スル也、

訓讀ハ、上ニテモ、末假名ニテモ、讀ヤスキ樣ニ、一方バカリ、點スルナリ、或上、或下、一二字、樂如此點シテ、中ヲアクレバ、傳寫ノ時、アヤマリアリ、

車馬、此兩字、シヤアバトヨメトモ、假名ニハ不點也、アハ音、餘ナリ、

古點、讀誤、甚多、鮮矣、仁、樂水、竊比於我老彭、於字、我字、下ニアラハコソ、我ヲトハ、讀ムベケレ、近比曲事ナリ、比於我老彭、トコソ、可讀也、見于註、

改字事、大學、親民、親作新、身有所忿懥、身ハ作心、命也、命作怠、彼爲善之、此四字、一向不讀也、論語、井有仁、仁作人、五十、卒字、誤也、加數年、加假、聲近、瓜祭、瓜必字、誤也、

不二和尚曰、吳音、漢音ノ事、更難信、然本國久讀ツケタル樣ニ、ヨマヲバ、キカレヌナリ、一家仁、三家者、儒書ノ中ナレトモ、吳音、漢音、隨處讀之也、或又經文禪話、其ヤ、讀也、說禪、寂滅教、唱アゲ、又雪山成道、讀曲事也、セキベツトハ、漢音、是ハセメテ、外記ナドモ、大學如此、ヨメバコソアレ、セツセンヲ、セツサント讀ム、物笑也、又論語三十四十ヲ、スンテ讀ムコトハ、昔ヨリ、俗書讀ニ、讀ツケタレトモ、文字ハ、人前用也、人問年、スンテ、三十、四十、答ヘタラバ、カタコト、可笑也、世界申シツケ

タ樣ニ讀テ、早ク達理爲肝要也、雖然、鄉談、其外卑辭、又宜正之也、古點、不亦樂乎之類、イヤシキナリ、タノシマザランヤト讀テ好ナリ、唐音讀度也、其故ハ偶一句半句、ソラニ覺ユル時、ヲキ字、不知有其何字也、口惜哉、

儒釋道三敎

佛、周四代昭王二十六年甲寅四月八日、生于天竺刹利王家、日本地神五代不合尊卽位以來、八十三萬五千六百七十六年也、周五代穆王五十三年壬申入滅、年七十九、日本不合尊八十三萬五千七百五十四年也、自壬申、至元和十年甲子、二千五百七十三年也、

老子、周二十二代定王二年丙辰九月拾四日、生于楚國陳郡曲仁里、佛後三百四十五年、日本第一神武天皇五十六年也、周二十六代敬王二年癸未西去、壽八十八載、日本第三安寧天皇三十一年也、自癸未、至元和十年甲子、二千一百四十年也、

孔子、周二十四代靈王二十一年庚戌十一月四日、生于魯昌平鄉陬邑、此時老子五十五載、佛後三百九十九年、日本第二綏靖天皇三十一年也、周二十六代敬王四十一年魯哀公十六年壬戌四月八日卒、年七十三、日本第四懿德天皇三十二年也、自壬戌、至元和十年甲子、二千一百三年也、

南宋二代孝宗淳熙十六年己酉、新註行于天下、日本八十二代後鳥羽院尊成文治五年、判官殿衣川年也、自己酉、至元和十年甲子、四百三十六年也、

大明二代太宗永樂十三年乙未、四書五經大全獻之、日本百二代稱光院實仁二年應永二十二年也、自乙未、至元和十年甲子、二百十年也、

和點終

811.6
G29k
W

077110-000-5

811.6-G29k

桂菴和尚家法倭点

玄樹／著

M41序

DAC-0295